

## あとがき

本短篇集に収めた九つの作品はすべて本邦初訳で、翻訳に使用したテキストはピエール・クステイヤス編集による『ジョージ・ギッシング短篇集』(Pierre Coustillas, ed. *Collected Short Stories: George Gissing*, 3 vols. Grayswood Press, 2011-12) 所収のものである。九つの短篇はギッシングが十九歳だった一八七七年から八四年にかけて書かれた初期の作品なので、彼の生誕からアメリカ逃亡生活の終わりまでの略伝を最初に記しておきたい。

\* \* \* \*

ギッシング(George Robert Gissing, 1857-1903)は、一八五七年一月二二日、イングラント北部ヨークシャー州のウェイクフィールド(バラ戦争の古戦場として有名な町)の中心街で店を構えていた中産階級の薬剤師の長男として生まれ、下には四人の弟妹たちがいた。植物学に通じていた父親は、地方の植物を調査して出版した書籍が何冊もあり、自宅には数多くの蔵書——ギッシングが読破した最初の小説は流行作家ディケンズの『骨董屋』(一八四〇〜四一)——を持っていて、学問・知識による豊かな精神の陶冶において息子に大きな影響を与えた。一方、教養がなかった母親は信心深いだけで、息子を愛撫することもなかったようである。幼

少時代のギッシングは地方の学校に通っていたが、十三歳の時に父親が亡くなると、チェシャー州のリンドウ・グロウヴ・スクールへ行かされた。秀才の誉れが高かったギッシングは、十五歳の時にオーエンズ・カレッジ（現在のマンチェスター大学の前身）に入学し、古代および現代の言語と文学で高い能力を発揮した。この時期にギリシャとローマの文化についての知識を身につけ、それが彼の最大の関心事となり、その後の人生では貧困生活における唯一の楽しみとなる。カレッジ在学中は、教師たちから高い評価を受けて数々の賞や奨学金を獲得し、オックスフォードかケンブリッジの学者になるだろうと将来を囑望されていた。だが、最終学年を迎えた十八歳の春、貧乏学生として孤独な下宿生活を送っていた時に肉欲に負け、十七歳の貧しい孤児——であるがゆえに、カレッジ近くのパブで自活のために春を売ることがあった——ネル（*Marianne Helen Harrison, 1858-88*）と関係を持つて恋に落ちてしまった。ところが、ギッシングはネルが足を洗って正直に働いて暮らせるように、カレッジのロッカー室で書籍、金、衣類を盗むようになる。そして、一八七六年三月三十一日に逮捕されて放校処分となり、学者としての将来を棒に振ってしまった。この時の事件は強迫観念となって常に彼を不安に陥れ、その後の彼の作品において特にセックス、金、階級の問題に大きな影響を及ぼすことになる。ギッシングは、この犯罪で一ヶ月の監禁と重労働を課されてしまうが、釈放後は自分自身を社会から追放された流浪者（エツァイル）と見なすようになった。また、この犯罪行為によって罪の意識に悩まされるようになり、それが彼の自虐的な行動と悲観的な人生観を形成する原因となる。そ

うした罪の意識は、本短篇集では、孫娘を救うためとはいえ親切な建築屋の金を盗んで恩を仇で返した結果、罪悪感で懊悩の日々を送る「高すぎた代価」の靴直し屋を通してリアルに描写されている。

この窃盗事件に当惑した大学当局は、哀れな奨学生に対してもっと人間的な対処ができなかったことに責任を感じ、ギツシングのために資金を集めてくれた。それに加え、ギツシング家の知り合いたちの善意もあって、一八七六年九月、母親は息子をアメリカへ逃がしてやることができた。流罪に処せられたようなギツシングのアメリカでの生活は一年ほど続いた。彼は異郷の地で人生の新たなスタートを切るものと思われたが、実際にはそうならなかった。最初の地ボストンで一ヶ月あまりを過ごし、その新聞『ボストン・コモンウェルス』の一〇月二八日号に絵画展の批評文を書いたりしたが、その後の根なし草に似た人生を暗示するかのようになりに長居することはなかった。一二月になるとマサチューセッツ州のウォルサムに移動し、設立されて間もない高校の臨時教師の職を得て、そこでフランス語、ドイツ語、英語を教えた。しかし、翌年三月一日、十九歳になっていたギツシングは授業のある教室に現れず、そのまま姿をくらませてしまう。その理由は、故郷のネルから帰国を願う手紙をもらっていた彼が、勤務校で一つ年下の女生徒 (Martha Barnes, 1858-1946) と深い仲になることに対して良心の呵責を感じたからだと言われている。だが、彼の一連の作品から判断すると、貧困と肉欲による一年前の犯罪のために自分は教養ある中産階級の女性には受け入れてもらえないと思っ

たことが、逃亡の主たる理由だったと考えられる。

放浪性が次第に生活を支配するようになったギッシングの逃亡先はシカゴであった。彼は金に窮してシカゴで文筆活動に乗り出し、その地方の新聞に短篇小説を寄稿するようになる。これはギッシングにとって文字どおり小説家としての第一歩であった。その時の悲惨な状況は代表作『三文文士』（一八九二）の第二八章で売れない小説家ウエルプデイルのシカゴ体験を通して如実に語られている。ギッシングがシカゴに着いた時の所持金は五ドルだけで、一週間分の下宿代を払うと残りが数十セントになったので、飛び込みで入った『シカゴ・トリビューン』社の主筆に頼んで英国の生活についての短篇小説を書かせてもらうことになった。なけなしの金でペンとインクと紙を買った彼は、みすぼらしい下宿の休憩室で騒々しい男たちに囲まれながらも、初めての短篇小説「親の因果が子に報う」を二日足らずで書き上げたという。この原稿は主筆の気に入り、一八七七年三月一〇日の土曜増刊号に掲載され、彼は謝礼として十八ドルを受け取った。この短篇に続いて同紙の三月三一日号に掲載された第二作目が「安らかに眠れ」で、四月一四日の土曜増刊号に出たのが前述の「高すぎた代価」である。「親の因果が子に報う」は教養ある中産階級の若者が（街の女に墮する直前の）労働者階級の娘に同情して恋に落ちるといふ作者自身の経験に基づいたものである。父に反対された主人公はアメリカに渡り、高校教師をしている間に父の嘘の手紙で婚約者が死んだと知らされるが、生徒の一人と結婚して幸せな生活を送っていると死んだはずの婚約者が現れ、最後は彼女によって冷た

い川に引きずり込まれて無理心中を強いられる。「安らかに眠れ」も、フランスの貴族が小作人の娘と恋に落ちて結婚し、その貴族の弟の遺産相続をめぐる悪巧みにだまされた娘が家を飛び出して自殺するという話で、不幸な結末となる身分違いの結婚が「親の因果が子に報う」と共通するテーマとして劇的に描かれている。このテーマは、家父長制の既成のパラダイムが女性を二者択一の商品であるかのように〈家庭の天使〉と〈堕ちた女〉という二つのカテゴリーに分類していたヴィクトリア朝社会で、学生時代に肉欲ゆえに街の女と関係を持つて犯罪に手を染めることで将来の夢がつかえたギッシングの運命論的な悲観主義から生れたものである。

傷心を抱いて漂白の旅に出るテーマや生活に嫌気がさして流離さすらいの旅を続けるテーマは「安らかに眠れ」の主人公に色濃く投影されているが、ギッシングもまた同じようにシカゴで幾つかの短篇を書いたあと、七月になるとニューヨークに移動することになる。そして、彼は「親の因果が子に報う」がトロイの新聞社によって無断掲載されたことを知り、編集長に言えば雇ってもらって何か書けるだろうと思ひ、期待して足を運んだのだが、無残にも追い返されてしまった。『三文文士』のウェルプデイルの話によれば、トロイで金に窮したギッシングは数日間をピーナツだけで食いつないだようである。そのあと、旅の写真屋の助手となって数ヶ月ほどニューイングランドを渡り歩いたのち、九月になってボストンから船に乗って帰国した。以上がギッシングの生誕からアメリカ時代の終わりまでの略伝である。

\* \* \* \* \*

次にギッシングの日本における受容とその文学的特質について述べてみたい。日本においてギッシングは随筆集『ヘンリー・ライクロフトの私記』（一九〇三）の著者として、つとにその名を知られた作家であったが、現在では後期ヴィクトリア朝の自然主義を代表する小説家として高く評価されている。生涯に二二の長篇・中篇小説、百以上の短篇小説、そして随筆集や旅行記や批評書などを著したギッシングは、生存中に限って言えば、ある程度の成功を収めることしかできなかった。しかし、二十世紀の後半になって——特に幾つかの小説が再版されてギッシング研究が急に勢いを増した一九六〇年代以降——彼自身と彼の作品に対する関心が着実に高まり続けている。その関心の高まりを實質的に支えてきたのは、一九六五年に『ギッシング・ニューズレター』として創刊され、一九九一年に『ギッシング・ジャーナル』と改称されて現在に至っている季刊誌である。この雑誌は学術論文、詳しい書評、出版物の紹介に加え、ギッシング研究に資する最新の情報を常に提供している。その意味において、創刊時から長きにわたって編集委員を務められたピエール・クステイヤス氏、ジェイコブ・コールグ氏、そして小池滋氏のギッシング研究への貢献には、計り知れないものがある。特に、フランス・リール大学名誉教授のクステイヤス氏は、半世紀以上も前から世界のギッシング研究の泰斗として活躍され、その業績数は枚挙にいとまがない。

小池氏は一九七〇年にクステイヤス氏と一緒に『東洋と西洋のギッシング』(Gissing East and West: Four Aspects)を出版されたが、そこに掲載された「日本におけるギッシング」によれば、この作家が日本で最初に紹介されたのは一九〇八(明治四一)年のことであった。オックスフォード大学留学から一九〇六年の夏に帰国した英文学者、平田禿木(とくぼく)(一八七三—一九四三)が翌年の文学雑誌『趣味』の新年号(第三卷)で、「愛読せる外国の小説戯曲」に関する調査に対し、「ジヨオジ・ギッシングの作にて『ヘンレエ・ライクロフトの手記』といふもの、幾度くり返しても新しき趣味を覚え候、愛讀書とも申すべきか」と回答した時のことである。そして同じ一九〇九年には、のちに慶應義塾大学教授となる戸川秋骨(一八七一—一九三九)が、『ライクロフト』の「春」から八章を訳して『趣味』の七月号に出している。それ以後、日本において最も人気があったギッシングの作品は小説ではなく、この随筆集『ライクロフト』であった。市河三喜の注釈つきテキストが学校などで使われ始めた一九二一年以降、特に一九二〇—三〇年代に多くの先達の手によって『ライクロフト』が翻訳された。また、戦時中に平和主義のため不遇な時代を送ったギッシングの『ライクロフト』——夏目漱石の『点頭録』(一九一六)にギッシングと反軍国主義を論じた一節がある——は、戦後の一九五〇—六〇年代に第二の翻訳黄金時代を迎えることになる。

学生時代に『ライクロフト』のテキストを英語の授業や翻訳で読んだ経験のある年輩の作家や文学者で、この本を愛読書として挙げる人は非常に多い。例えば、辻邦生(一九二五—

九九）は水村美苗と交わした往復書簡『手紙、栞を添えて』（一九九八）でギッシングを取り上げてゐる。それは、東京生まれの彼が信州の自然美に魅せられて松本の旧制高校を選び、同世代の人たちと同じように『ライクロフト』を読んだ結果として、「季節の移りゆきを、愛着のまなざしで眺めるライクロフトという人物に、どこか日本の隠者風の面影を感じ、（中略）イングランドの片田舎に静かな家を持ち、本に囲まれて暮らすギッシングに大いに憧れた」からであった。辻邦生と同じ東大仏文科卒で、短篇「司令の休暇」（一九七〇）など骨肉を扱った作品が多い阿部昭（一九三四～八九）は、「ヴィヴァルディの『四季』みたいなもので、（中略）鳥の声がしたり疾風が来たり、自然そのもののような呼吸の変化が面白い」という理由で、『読みなおす一冊』（一九九四）に『ライクロフト』を選んでいる。辻邦生より一代ほど若い一九四七年生まれのハードボイルド作家、『水滸伝』（一九九九～二〇〇五）で有名な北方謙三も花鳥風月を友とする晴耕雨読の生活に憧れていたので学生時代から、そして作家になってからも『ライクロフト』を繰り返し読んでゐると、ある記事で述べていた。

このような有名作家のみならず、老いを養う知識人の多くにとつても、ギッシングの作品と言へば何はさておき『ライクロフト』であった。それは、『ライクロフト』が多種多様なトピックを選んで鋭い人生批評や独特の美学を平明達意に綴った随筆であるからというよりも、全篇が無常観に統一された鴨長明の『方丈記』（一二二二）や吉田兼好の『徒然草』（一三三〇～三一）のように、名物の巷を離れて草木虫魚の世界に心を遊ばせることを最も高尚な生き

方としている点において、もののおわれ、幽玄、わび・さびの伝統を持つ日本人の心の琴線に触れる随筆であったからだと思われる。とはいえ、『ライクロフト』はギツシングが最初の妻ネルの死後、ミュージック・ホールで知り合つて結婚した労働者階級の無知な女 (Edith Underwood, 1867-1917) の生存中に、『三文文士』の翻訳許可を求めてきたフランスの教養ある中産階級の女性 (Gabrielle Fleury, 1868-1954) と同棲するようになってから——過酷なロンドンの貧困生活から解放され、精神的にも金銭的にも余裕ができてから——書かれた半自叙伝的な随筆であることを忘れてはならない。編訳者もライクロフトの生活に憧れ、彼の意見に心の底から共鳴する者の一人であるが、その反面いつも不満な気持ちの片隅にわだかまっていた。『ライクロフト』はギツシングが死ぬ直前に出版された辞世の書ではないか、小説が大部分を占める彼の作品群の中にあつて特異な存在として位置づけるべきではないか、という釈然としない気持ちがあつたのである。

ありふれた日常的な感覚を退けるために俗世間から逃避した孤高の人間の作品だけを文学と呼ぶのであれば、それは道徳性や実用性を無視して他の文化領域の介入を許さない審美主義の作品のように、文学が本来的に持つ多様性と重層性を極度に制限し、結局は文学自体を弱体化させてしまう。『ライクロフト』の名声はギツシングを自然の豊かな田園生活と結び付け、『イオニア海のほとり』(一九〇一)での古代文明に対する彼の追慕の念が異郷生活を連想させるのは事実だが、そうした田舎や外国は彼がロンドンの質素な下宿の窓から陰鬱な深い霧を通

して見ようとしたものにすぎない。このようなギッシングの想像の羽翼を伸ばした狂おしいばかりの憧憬の念の視覚化は、彼の大都市に対する憧れが幻滅の悲哀と化したあと、空想と言語的表出のレヴェルで起きた新たな代償行動として見なすことができる。たしかに、『サーザ』(二八八七)のイーストボーン、『因襲にとられない人々』(二八九〇)のイタリア、『埋火』(二八九五)のギリシャ、『下宿人』(二八九五)のロンドン郊外、『渦』(二八九七)の北ウエールズ、『命の冠』(二八九九)のヨークシャー渓谷のように、ギッシングが作品の舞台を田舎や外国に設定した小説は数多くある。本短篇集に収められた初期の作品でも、「安らかに眠れ」のピレネー山麓の村、「いけ好かない恋敵」のハンプシャー州、「ブラウニーの復讐」のヨークシャー渓谷、「初めてのリハーサル」と「女相続人の条件」のイングランド中部地方が、それぞれ豊かなローカル・カラーで描かれている。しかし、ギッシングの傑作とされる小説の舞台の多くは、みじめな生活を余儀なくされた彼が精通していたロンドンである。大都会ロンドンには彼を引き付けて離さない創作活動の磁場だったのだ。都市における貧困の情景が頻繁に描かれた初期の小説群——例えば、貧しい芸術家と売春婦の不幸な結婚を描いた『暁の労働者たち』(二八八〇)、理想的な芸術と過酷な現実生活の対立の中で苦しむ若者を描いた『無階級の人々』(二八八四)、遺産相続をめぐる下層階級の急進的な若者の人生の浮沈を描いた『民衆』(二八八六)——を読むと、彼はスラム街の小説家ではないかという印象を受ける。本短篇集でも、「親の因果が子に報う」の前半の舞台は新興産業都市マンチェスターであるが、主

人公が成功して故郷に錦を飾ろうと上京して夢がついえる「高すぎた代価」の舞台はロンドンである。また、「フィードの復讐」でヒロインが移動する空間はロンドンのホクストンであり、そこはスラム街のどん底生活が活写される長篇『ネザー・ワールド』（一八八九）の舞台クラーケンウエルと隣接している。

アメリカで放浪生活を送ったギッシングは一八七七年一〇月三日にリヴァプール港に着いたが、それから六週間ほどウエイクフィールドに里帰りしたあと、作家として身を立てるためにすぐさまロンドンに上京した。この時の彼の心境は、英国の伝説的な人物ディック・ホイックティントンと同じように、黄金で舗装されているという噂のロンドンに出て立身出世することを夢見た「高すぎた代価」や「初めてのリハーサル」の主人公と同じであっただろう。しかしながら、それはギッシングの場合も空夢に終わる。彼はロンドンで再会後に結婚したネルと悲惨な貧困生活を営みながら、スラム街の多いクラーケンウエルやイズリントン地区で頻繁に引越を繰り返していた。このような引越癖は行く先々で繰り返されるネルの売春と喧嘩が主たる原因であったが、同時にアメリカでの逃亡生活の原因となつた彼自身の犯罪と罪の意識から生じた疎外感の結果でもある。

\* \* \* \* \*

ギッシングは、教養はあるものの貧しい境遇ゆえに苦しむ若者が不条理に満ちた社会の犠牲となる経緯を自然主義的な筆致で描き、そうした若者の疎外感を通して貧困、結婚、性、階級、女性問題、現代文明の卑俗性、芸術の商業化といったテーマを論じている。特に、ギッシングが得意とする疎外感のモチーフは、産業革命後の都市の近代人がもつ意識と密接に関わっている。社会集団における生活上の桎梏しごから解放された近代人は、資本主義の発展に伴って人口が急増した都市——例えば、一八〇一年に百万だった人口が百年後の一九〇一年には六五一万になったロンドン——で前近代的な社会の帰属意識を喪失し、都市空間における孤独と不安によってアイデンティティの危機に陥った。そのことを実証する事例史としてギッシングの生涯と作品ほど興味深いものはないだろう。ギッシングの最晩年にロンドンへ留学し、大都会の群衆の中で疎外感に苛まれ、金欠ゆえに下宿代の安い郊外でギッシング同様に引越を繰り返していた漱石は、孤立した人間の集合体にすぎない近代社会について、『それから』（一九〇九）の代助に「文明は我等をして孤立せしむるものだ」と解釈させた。日本の近代をテーマにした漱石の作品のように、ギッシングの生涯と彼の分身的人物が数多く登場する作品は、近代の文明社会によって人間が強いられた孤立を示す第一級の歴史資料として読むことができる。

近代の知識人であったギッシングは、自らの貧困ゆえに有産階級から疎外されたように感じていた。しかし、同時に無産階級については貧困と悪徳を結び付けて考え、自分の方から労働者たちを疎外する傾向があった。それゆえ、どんなテーマを小説で扱うにせよ、いつも反大衆

的、悲観主義的、宿命論的な立場をとった。教養や芸術に象徴される人間の高邁な理想や高尚な思想は、近代資本主義社会における民衆の教育環境と識字率の向上によって興隆した低俗な大衆文化に押し流されると、彼は心の中で思っていた。後期ヴィクトリア朝を病んだ状態にしていた社会問題がギッシングに与えたものは、本能や因襲を抑圧することで教養や芸術に依拠した文化が生まれる可能性はない、という自然主義文学に特有の悲観的で決定論的な考えである。その結果、彼は有産階級にも無産階級にも属さない、いわば物理的疎外と心理的疎外を象徴する無階級の人間となってしまうたのである。しかし、初期の長篇小説群を読めば分かるように、ギッシングが個人としての労働者に対して哀れみの心を抱いていた点もまた看過すべきではない。この嫌悪と同情の共存において典型的に見られるように、ギッシングは多くの問題（社会、階級、文明、都市、大衆、教育、改革、女性、結婚、家庭、商業、金銭、芸術、科学、人生、自己など）に矛盾した感情を抱き、その激しい葛藤に絶えず苦悩していた。私たちが彼の作品に感じる力強さは、まさにこの葛藤の激しさに他ならない。ギッシングの小説の主人公たちは両価感情アシビクアフェンスによって精神が揺らぐことが多いが、そうした人物描写は彼が最も得意とする分野である。このように様々な問題に対して社会的に抑圧せざるを得ない矛盾した感情を小説の中で表現し得たからこそ、ギッシングは肺の持病に抗して四六歳まで生き延びることができたのかもしれない。彼が亡くなったのは、ヴィクトリア女王の崩御から数年後の一九〇三年一月二八日で、場所は「安らかに眠れ」の舞台でもある保養先のピレネー山麓の村であった。

\* \* \* \* \*

以上、これまでに出版した編著『ギッシングの世界』（英宝社、二〇〇三）と『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化』（溪水社、二〇〇七）を利用して「あとがき」を記した。「あとがき」だけで判断すると、自然主義作家ギッシングの小説は悲観主義や運命論に支配された暗いトーンの商品ばかりのようだが、『チャールズ・ディケンズ論——批評研究』（一八九八）やロチェスター版ディケンズ全集の各作品に寄せた序文からなる『不滅のディケンズ』（一九二五）が示すように、ギッシングはディケンズを心の底から敬愛しており、実際に作品には喜劇的息抜きとしてディケンズ的な笑いやユーモアがちりばめられている。クステイヤス氏はギッシング研究の集大成と言える評伝（*The Heroic Life of George Gissing*. 3 vols. Pickering, 2011-12）の中で、「基本的にギッシングは楽道家で理想主義者である。若い頃の生活で心が荒廃し、四十の頃には誰よりも厳しい運命の処遇を受けて幻滅を感じたが、暗黒時代においても生きる意欲を完全に失うことはなかった。一知半解の批評家たちは彼の小説の陰鬱性を得々と語っているが、作品の全部が一樣に陰鬱というわけではない」と喝破している。例えば、『下宿人』、『都会のセールスマン』（一八九八）、『命の冠』、『ウィル・ウォーバートン』（一九〇五）を読んで、読者が暗澹たる気持ちになることは決してない。本短篇集の「初めてのリハーサル」、「いけ好かない恋敵」、「糸を紡ぐグレートヒェン」、「女相続

人の条件」のように悲観的要素がなく、主人公の勘違いによる喜劇的な作品も少なくない。

本短篇集は編訳者が勤務する大学で教養英語のテキストとして使用したギッシングの初期短篇集から九つの作品を選んで訳したものである。ギッシングが生涯に残した作品は以下のとおりで、原書に関しては編訳者がすべてオンライン化のために制作した電子テキストのウェブサイト（検索語は Gissing: E-texts）があるので、関心のある読者諸氏に御利用いただければ幸いである。

### 長篇小説・中篇小説

- 『暁の労働者たち』 *Workers in the Dawn: A Novel*. 3 vols. London: Remington, 1880.
- 『無階級の人々』 *The Unclassed: A Novel*. 3 vols. London: Chapman and Hall, 1884.
- 『民衆』 *Demos: A Story of English Socialism*. 3 vols. London: Smith, Elder, 1886.
- 『イザベル・クラレントン』 *Isabel Clarendon*. 2 vols. London: Chapman and Hall, 1886.
- 『サーザ』 *Thyrza: A Tale*. 3 vols. London: Smith, Elder, 1887.
- 『人生の夜明け』 *A Life's Morning*. 3 vols. London: Smith, Elder, 1888.
- 『ネザー・ワールド』 *The Nether World: A Novel*. 3 vols. London: Smith, Elder, 1889.
- 『因襲にとらわれない人々』 *The Emancipated: A Novel*. 3 vols. London: Bentley, 1890.
- 『三文文士』 *New Grub Street: A Novel*. 3 vols. London: Smith, Elder, 1891.

- 『デンジル・クウォリア』 *Denzil Quarrier: A Novel*. London: Lawrence & Bullen, 1892.
- 『流謫の地に生まれて』 *Born in Exile: A Novel*. 3 vols. London: A. & C. Black, 1892.
- 『余計者の女たち』 *The Odd Women*. 3 vols. London: Lawrence & Bullen, 1893.
- 『女王即位五十年祭の年』 *In the Year of Jubilee*. 3 vols. London: Lawrence & Bullen, 1894.
- 『イヴの身代金』 *Eve's Ransom*. London: Lawrence & Bullen, 1895.
- 『埋火』 *Sleeping Fires*. London: T. Fisher Unwin, 1895.
- 『下宿人』 *The Paying Guest*. London: Cassell, 1895.
- 『渦』 *The Whirlpool*. London: Lawrence & Bullen, 1897.
- 『都会のセールスマン』 *The Town Traveller*. London: Methuen, 1898.
- 『命の冠』 *The Crown of Life*. London: Methuen, 1899.
- 『我らが大風呂敷の友』 *Our Friend the Charlatan: A Novel*. London: Chapman and Hall, 1901.
- 『ヴェラニルダ』 *Veranilda: A Romance*. London: Constable, 1904.
- 『ウィル・ウォーバートン』 *Will Warburton: A Romance of Real Life*. London: Constable, 1905.

短篇小説

- 「ヨークシャーの娘」 “A Yorkshire Lass.” *Cosmopolis* 3 (August 1896): 309-26.
- 『人間がらくた文庫』 *Human Odds and Ends*. London: Lawrence & Bullen, 1898.

- 「市役所職員ブログデン氏」*Mr Brogden, City Clerk. Harmsworth Magazine 2* (February 1899): 39-43.
- 「ちぬけのサイモン」*“Simple Simon.” Idler 9* (May 1896): 509-14.
- 『蜘蛛の巣の家——短篇集』*The House of Cobwebs and Other Stories*. Introd. Thomas Secombe. London: Constable, 1906.
- 「条件付きの女相続人」*“An Heiress on Condition.” Philadelphia: Privately printed for the Pennell Club, 1923.*
- 『父の罪——短篇集』*The Sins of the Fathers and Other Tales*. Introd. Vincent Starrett. Chicago: Pascal Covici, 1924.
- 『境遇の犠牲者——短篇集』*A Victim of Circumstances and Other Stories*. London: Constable, 1927. Boston: Houghton Mifflin, 1927.
- 『ブニウニー——短篇集』*Brownie*. Introd. George E. Hastings, Vincent Starrett, and Thomas O. Mabbott. New York: Columbia UP, 1931.
- 『ジョージ・ギッシング——小話小品集』*George Gissing: Stories and Sketches*. Pref. Alfred C. Gissing. London: Michael Joseph, 1938.
- 『初めてのリハーサル』と『恋敵の聖職者』*My First Rehearsal and My Clerical Rival*. Writ. 1880. Ed. Pierre Coustillas. London: Enitharmon, 1970.

『「ジョゼフ」——九十年代半ばのキッシングの忘れられた短篇小説』“Joseph”: A Forgotten Gissing Story of the Mid-Nineties.” Ed. Pierre Coustillas. *Gissing Newsletter* 24.1 (1988): 1-14.

『アメリカ時代の埋もれた短篇小説』 *Lost Stories from America: Five Signed Stories Never Before Reprinted, a Sixth Signed Story, and Seven Recent Attributions*. Ed. Robert L. Selig. Lewiston, NY: Edwin Mellen, 1992.

文学批評、旅行記、回想記、随筆など

『チャールズ・ディケンズ論——批評研究』 *Charles Dickens: A Critical Study*. London: Blackie, 1898.

『イオニア海のほとり——南イタリア周遊記』 *By the Ionian Sea: Notes of a Ramble in Southern Italy*. London: Chapman and Hall, 1901.

『ディケンズの思ひ出』“Dickens in Memory.” *Literature* (21 December 1901): 572-75.

『ヘンリー・ライクロフトの私記』 *The Private Papers of Henry Ryecroft*. London: Constable, 1903.

『フォースターの「ディケンズ伝」』 *Forster's Life of Dickens*. Abr. Rev. London: Chapman and Hall, 1903.

『チャールズ・ディケンズの作品研究』 *Critical Studies of the Works of Charles Dickens*. New York: Greenberg, 1924. (『不滅のディケンズ』 *The Immortal Dickens*. London: Cecil Palmer, 1925.)

- 『自叙伝的覚書——テニソンとハクスリー』 *Autobiographical Notes: With Comments on Tennyson and Huxley*. New York: Gordon, 1961.
- 『社会民主主義に関する覚書』 *Notes on Social Democracy*. September 1880. Introd. Jacob Korg. London: Enitharmon, 1968.
- 『ギッシングのディケンズ関連著作——伝記および文献的調査』 *Gissing's Writings on Dickens: A Bio-bibliographical Survey Together with Two Uncollected Reviews by George Gissing from The Times Literary Supplement*. By Pierre Coustillas. London: Enitharmon, 1969.
- 『ビョーム・ギッシング——随筆小説』 *George Gissing: Essays and Fiction*. Ed. Pierre Coustillas. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1970.
- 「ロチェスター版『ライヴイッシュ・コペンハーゲン』の序文」 “Gissing’s Introduction to the Rochester *David Copperfield*.” Ed. Richard J. Dunn. *The Dickensian* 77 (Spring 1981): 3-11.
- 『シェイクスピア劇の主人公に関する六つのソネット』 *Six Sonnets on Shakespearean Heroines*. Ed. Pierre Coustillas. London: Eric & Joan Stevens, 1982.
- 『ロバート・バーナムス論』 *George Gissing’s Essay on Robert Burns: A Previously Unpublished Manuscript*. Ed. Jacob Korg. Lewiston, NY: Edwin Mellen, 1992.
- 『ビョーム・ギッシングの詩』 *The Poetry of George Gissing. Studies in British Literature* 17. Ed. Bouwe Postmus. Lewiston, NY: Edwin Mellen, 1995.

ジョージ・ギッシング

- Two Letters from George Gissing to Joseph Conrad*. Cambridge, Eng.: Curwen, 1926.
- The Letters of George Gissing to Members of his Family*. Ed. Algernon and Ellen Gissing. London: Constable, 1927.
- Selections Autobiographical and Imaginative from the Works of George Gissing*. Ed. Alfred C. Gissing. Introd. Virginia Woolf. London: Jonathan Cape, 1929.
- The Letters of George Gissing to Eduard Bertz, 1887-1903*. Ed. Arthur C. Young. New Brunswick, NJ: Rutgers UP, 1961.
- George Gissing and H. G. Wells: Their Friendship and Correspondence*. Ed. Royal A. Gettmann. London: Rupert Hart-Davis, 1961.
- George Gissing's commonplace Book: A Manuscript in the Berg Collection of the New York Public Library*. Ed. Jacob Korg. New York: New York Public Library, 1962.
- The Letters of George Gissing to Gabrielle Fleury*. Ed. Pierre Coustillas. New York: New York Public Library, 1964.
- Coustillas, Pierre and Patrick Bridgwater. *George Gissing at Work: A Study of His Notebook "Extracts from my Reading."* Greensboro, NC: ELT, 1988.
- Henry Hick's *Recollections of George Gissing, together with Gissing's Letters to Henry Hick*. Ed.

- Pierre Coustillas. London: Enitharmon, 1973.
- The Letters of George Gissing to Edward Clodd*. Ed. Pierre Coustillas. App. "Across the Pyrenees" by Gabrielle Fleury. London: Enitharmon, 1973.
- George Gissing on Fiction*. Inc. "The Coming of the Preacher" and "The English Novel of the Eighteenth Century." Ed. Jacob Korg and Cynthia Korg. London: Enitharmon, 1978.
- London and the Life of Literature in Late Victorian England: The Diary of George Gissing*. *Novelist*. Ed. Pierre Coustillas. Lewisburg, PA: Bucknell UP, 1978.
- Landscapes and Literati: Unpublished Letters of W. H. Hudson and George Gissing*. Ed. Dennis Shrubbsall and Pierre Coustillas. Norwich, Eng.: Michael Russell, 1985.
- Brief Interlude: The Letters of George Gissing to Edith Sichel*. Ed. Pierre Coustillas. Edinburgh: Tragara, 1987.
- The Collected Letters of George Gissing*. Ed. Paul F. Matheisen, Arthur C. Young, and Pierre Coustillas. 9 vols. Athens, OH: Ohio UP, 1990-97.
- George Gissing's American Notebook: Notes, G. R. G., 1877*. Ed. Bouwe Postmus. Lewiston, NY: Edwin Mellen, 1993.
- George Gissing's Memorandum Book: A Novelist's Notebook, 1895-1902*. Ed. Bouwe Postmus. Lewiston, NY: Edwin Mellen, 1997.

*An Exile's Cunning: Some Private Papers of George Gissing.* Ed. Bouwe Postmus. Wormerveer, Neth.: Stichting Uitgeverij Nourid, 1999.

*George Gissing's Scrapbook.* Ed. Bouwe Postmus. Amsterdam: Twizle, 2007.

## 著書目録

- Coustillas, Pierre. "Gissing's Short Stories: A Bibliography." *English Literature in Transition* 7.2 (1964): 59-72.
- Wolff, Joseph J., comp. and ed. *George Gissing: An Annotated Bibliography of Writings about Him.* De Kalb, IL: Northern Illinois UP, 1974.
- Collie, Michael. *George Gissing: A Bibliography.* 1st. ed. Toronto: U of Toronto P, 1975.
- . *George Gissing: A Bibliographical Study.* 2nd. ed. Winchester: St. Paul's Bibliographies, 1985.
- Coustillas, Pierre. *George Gissing: The Definitive Bibliography.* High Wycombe: Rivendale, 2005.

## 翻訳

- 『ヘンリ・ライクロフトの私記』中西信太郎訳（岩波文庫、一九四六）（新潮文庫、一九五一）
- 『蜘蛛の巣の家』（全二巻）吉田甲太郎訳（岩波文庫、一九四七）（新潮文庫、一九五一）
- 『ヘンリ・ライクロフトの私記』平井正穂訳（岩波文庫、一九五一）

『ギッシング選集』（全五巻）小池滋責任編集（秀文インターナショナル、一九八八）

第一巻 『三文文士』 土井治訳

第二巻 『流論の地に生まれて』 溝上和雄訳

第三巻 『余計者の女たち』 太田良子訳

第四巻 『埋火・イオニア海のほとり』 土井治・小池滋訳

第五巻 『チャールズ・ディケンズ論』 小池滋・金山亮太共訳

『余った女たち』 倉持三郎・倉持晴美共訳（ニュー・カレント・インターナショナル、一九八八）

『渦』 太田良子訳（国書刊行会、一九八九）

『ネザー・ワールド』 倉持三郎・倉持晴美共訳（彩流社、一九九二）

『南イタリア周遊記』 小池滋訳（岩波文庫、一九九四）

『ヘンリー・ライクロフトの四季随想』 松田銑訳（河出書房新社、一九九五）

『ギッシング短篇集』 小池滋編訳（岩波文庫、一九九七、「境遇の犠牲者」「ルーとリス」「詩人の旅行

かばん」「治安判事と浮浪者」「塔の明かり」「くすり指」「ハンブルビー」「クリストファーソン」）

『無階級の人々』 倉持三郎・倉持晴美共訳（光陽社、一九九八）

『ヘンリー・ライクロフトの私記』 池中央訳（光文社、二〇一三）

本短篇集に収めた各作品の出典

「親の因果が子に報う」

“The Sins of the Fathers.” *Chicago Tribune* (Saturday Supplement), 10 March 1877. Reprinted in *Troy Daily Times*, 14 July 1877. Collected in *The Sins of the Fathers and Other Tales*.

Chicago: Pascal Covici, 1924. 1-31.

「初めてのリハーサル」

“My First Rehearsal.” First published in *English Literature in Transition* 9.1 (1966): 1-10.

Collected in *My First Rehearsal and My Clerical Rival*.

「高きおた代画」

“Too Dearly Bought.” *Chicago Tribune* (Saturday Supplement), 14 April 1877. Collected in *The Sins of the Fathers and Other Tales*. 91-124.

「いけ好かない恋敵」

“My Clerical Rival.” First published in *My First Rehearsal and My Clerical Rival*. Ed. Pierre Coustillas. London: Enitharmon, 1970. 21-30.

「フューユの遺産」

“Phoebe.” *Temple Bar* 70 (March 1884): 391-406. Reprinted in *Living Age*, 5 April 1884. 28-37. Collected in *Stories and Sketches*. London: Michael Joseph, 1938. 15-44.

「糸を紡ぐグレートヒエン」

“Gretchen.” *Chicago Tribune* (Saturday Supplement), 12 May 1877. Collected in *The Sins of the Fathers and Other Tales*, 33-55.

「安らかに眠れ」

“R. I. P.” *Chicago Tribune* (Saturday Supplement), 31 March 1877. Collected in *The Sins of the Fathers and Other Tales*, 57-89.

「女相続人の条件」

“An Heiress on Condition.” First published in volume form for the Pennell Club of Philadelphia in 1923. Most likely written in January or February 1880. The manuscript, now in the Berg Collection, bears Gissing’s address in the top right-hand corner, “G. R. Gissing, 5 Hanover St., Islington, N.”

「ブラウニーの復讐」

“Brownie.” *Chicago Daily Tribune*, 29 July 1877. Collected in *Brownie*. Introd. George E. Hastings, Vincent Starrett, and Thomas O. Mabbott. New York: Columbia UP, 1931. 25-38.

二〇一六年立夏 名古屋